

梨にニトランダ 使い続けて30年



年明けから暮れまで、一年中作業が続く果樹。
今回ご出演いただいた伊藤克則さんは、長野県飯田市で30年以上、果樹栽培を続けておられるベテラン生産者です。
果樹栽培に関する苦労話や、収穫物に対するこだわりについてお伺いしました。



サンアグロ
SUN AGRO CO., LTD

■剪定は年明けの重要な作業

伊藤さんは桃、梨、りんご、柿を全部で1.2ヘクタール栽培されています。
「果樹は一年を通して作業があります。収穫や出荷はもちろんですが、それ以外の剪定や受粉などの作業も上手く配分できるように、果物の種類と品種を選んで栽培しています。」



4月下旬、梨満開。飯田の春。

■梨の芽出し・追肥・元肥

「3月下旬の芽出し肥と、7月中下旬の追肥に『ニトランダ』を、それぞれ反当30〜40キロ。10月下旬の元肥に『ホルム窒素入り肥料』を、反当75キロ施用しています。」
芽出し・追肥に使われているニトランダは、硝酸態チッソが主成分の速効性肥料。元肥に使われているのは、ホルム窒素入りの緩効性肥料。それぞれの肥料を、その特徴に合わせて使い分けておられます。

■使い続けて30年 もう当たり前

「もう30年、同じように使っています。ニトランダを使い始めた頃は、他の肥料と明らかに違いを感じました。でも今は永年使い続けているため、当たり前になってしまっただけです。」
「野菜に比べると果樹は肥料の効果に分かりにくい。新梢の伸び具合などで肥効を判断しています。それから、定期的に行っている土壌診断の結果も、施肥の判断材料になっています。」

■果樹の生育は、土の中50% 土の上50%

「果樹の生育に関する要因のうち、50パーセントが『土の中』、50パーセントが『土の上』です。」
「それはどういうことですか？」
「施肥や土作りは『土の中』の話。剪定や受粉、それから天候は『土の上』の話です。どれも重要で、特にこれ！」という話。ただ、お天道様のご機嫌だけは、我々ではどうすることも出来ません。ここが難しいところです。」
ベテラン生産者ならではの、言い回しで



吊るし柿。まるで飾り付けられたよう。



10月下旬。収穫間近の市田柿。一月後には、「吊るされ」ます。

「一年の作業の中で、特に重要だと位置づけている作業について、お聞きしました。」
「大切なのは冬場の剪定と、春先の受粉です。特に年明けから3月一杯にかけて行う剪定は重要です。日光が樹全体にまんべんなく当たるように仕上げるのがコツ。仕上げ方が収穫物の品質にも大きく影響します。」

■お客様に喜ばれる果物を

「後継者の問題もあり、栽培規模や果樹の選定など、なかなか思うようにならないことも事実です。でも果物は美味しい。お客様が喜んでくれる、甘くて大きな果実を作ることを、永年目指し続けています。」
品質が良くても、豊作だと値がつかない。不作でも、品質が悪ければ、やっぱり値がつかない。これが現状だそうです。

ただ、伊藤さんの最後の言葉に、生産者としての信念を感じました。
伊藤さん、ご出演いただき、本当にありがとうございました。



■編集後記(写真:りんご園から南アルプスを望む)
関東近郊でこれだけの果樹が揃うのは長野県だけ。中でも飯田市は「果樹王国」の名にふさわしい地域。そんなところでも、高齢化と後継者不足が問題になっています。ベテラン生産者が持つ知識・経験は、俄かに身に付くものではありません。次世代に、何とか引き継いでほしい。切に感じた取材でした。